



動物：ウマ（乗用馬），中半血種，16歳2ヵ月齢，北海道産，繋養地一東京。

臨床的事項：警視庁騎馬隊乗用馬として使役されていた。剖検7ヵ月前，心ブロック（聴診上）。剖検2週間前頃から下痢。種々治療が施されたが，下痢は良化せず。剖検2日前から起立不能となり，殺処分。直ちに剖検に供された。

主な肉眼的所見：心臓の変化としては心膜腔液中等度増量（琥珀色），心冠溝脂肪組織の膠様化，冠状動脈軽度蛇行，左心室の後乳頭筋（心房下乳頭筋）及びその隣接領域の心室筋層に米粒大～小豆大の灰白色の限局性病巣散在（提出標本）があげられた。その他の臓器の主な肉眼的変化としては次の通りであった。(1)盲・結腸の粘膜腫脹，糜爛，偽膜形成，潰瘍形成及び粘膜下組織肥厚。(2)下腹部腹膜の断裂並びに腹膜下出血。(3)脳底部の硬膜下血腫。(4)浅胸筋及び四肢上部諸筋の筋肉変性。(5)全身各所擦過傷及び蕁創。(6)全身各所のリンパ節の髓様腫脹。(7)肺における少数の大豆大の淡赤灰白色硬結巣，点状乃至巣状出血及び肺動脈における混合血栓形成。

左心室後乳頭筋（心房下乳頭筋）の組織学的変化：限局性病巣が散在する中に，同じ円状層状構造を示す結節性病巣がみられた（図1，HE，×26）。結節性病巣には内部から外部に向かって次の各層が帯状に存在していた。(1)心筋線維の凝固壊死（中心部）。(2)好中球を主とする細胞浸

潤，それらの破片物を混えた融解壊死，心筋線維の壊死性変化及び菌糸の存在（菌糸層）。菌糸は幅3～4µm，隔膜を有し，分岐しながら放射状に伸び，心筋線維内に侵入しているところあり（図2，HE，×505）。(3)リンパ球及びプラズマ細胞を主とする円形細胞浸潤（層）。(4)核破片物より成る壊死（層）。(5)線維芽細胞，組織球及び類上皮細胞，好中球，リンパ球，プラズマ細胞及び巨細胞より成る肉芽腫性反応（層）。

その他の限局性病巣には菌糸の存在がなく，巣状に心筋が消失し，肉芽組織性反応を示す病変と細胞成分が極度に乏しく，主として膠原線維より成る限局性心筋線維化病変とがみられた。後者の病変は右心房筋の各所並びに房室伝導系領域にも存在した。なお，菌糸を保有した結節性病巣は肺にもみられた。盲・結腸には微生物を見出すことは出来なかったが，慢性肉芽腫性腸炎の変化が観察された。

心筋にみられた菌糸はアスペルギルスで，肺におけるアスペルギルス感染に由来したものであると思われる。心筋にみられたアスペルギルス感染（focal aspergillosis）は稀有な例である。形態病理発生的に心筋のアスペルギルス性病変は既存した限局性心筋線維化の病巣に，その菌糸が着床したことによって惹起されたものであると思われる。

診断：限局性心筋線維化並びにアスペルギルスによる限局性肉芽腫性心筋炎。